

第 43 回 設楽ダム魚類検討会 議事概要

1. 検討経緯等

- 前回検討会においての指摘とこれまでの対応について報告した。

2. R5 生息状況調査成果及び飼育繁殖成果について

- R5 生息状況調査の結果、豊川流域の推定個体数は、前年と比べ増加傾向であるが、長期的には減少傾向であることを報告した。
- 放流実験を行っている支川では調査区間全域で当歳魚を確認し R5 繁殖状況は極めて良好であったこと、うち下流区間の確認個体数は過去最大数であったことを報告した。
- 豊川の魚類相が長期的に変化している可能性もあるため、ネコギギと併せて他の魚種も調査結果を確認した方がよいとの意見をいただいたため、これまでの調査結果を整理することとした。

3. 生息適地評価について

- 砂礫が掃流される大石などの隙間がネコギギの繁殖に正の効果をもたらす可能性について報告した。
- 次回検討会では、隙間前面の流速（砂礫の掃流）に係る説明変数を組み込んだ生息適地評価モデルを示すことについて報告した。また流速は面的な分布を考慮することが望ましいとの意見をいただいた。

4. 環境改善手法について

- 掃流による繁殖環境を考慮した中長期的な環境改善手法を河川の特性ごとに整理し報告した。
- また地域での保全活動を見据えた人力による間隙の創出なども短期的な環境改善として報告した。
- 環境改善箇所のうちダム下流河川においては、ダム完成後の変化を踏まえた対策を講じる必要があるとの意見をいただいたため、他河川とは別にダム下流はダム完成運用後を見据えた環境改善手法とすることとした。

5. 集団創設の設計（案）について

- 支川における R5 までの放流実験結果から、100 年後の絶滅確率 10%以下となる繁殖率が明らかになり、その条件を満たす淵が複数確認できたこと、またそのような淵を環境改善や維持により個体群の繁殖率を増加させることで、個体群の存続が見込まれることについて報告した。
- DNA 解析により F2（放流個体の子供）世代まで家系に偏りが見られない傾向が複

数の実験淵で確認されたこと、またその解析成果を用いた推定手法により F3 (F2 の子供) 世代の個体が確認されたことなどから、遺伝的多様性の確保が見込まれることについて報告した。

- 100 年後の絶滅確率を計算するために設定する初期個体数（放流個体含めた初期の推定生息数）については、これまで他河川のモニタリング成果を用いて算出した生残率及び繁殖率より設定していたが、放流実験を行ってきた支川の実態を踏まえ設定してはどうかとの意見をいただいたため、放流実験データを用いて算出することとした。
- 集団創設を設計するという考え方は、H15 年度から調査研究を続けてきて、技術の進展と新知見があったからこそ出来たことであり、ある意味画期的でもある。これを元にネコギギの保全に活かして欲しいとの意見をいただいた。

6. 地域保全について

- R5 より地元高校部活動によるネコギギ学習の支援を開始し、R6 も継続して実施することについて報告した。
- R6.8 に、「ネコギギがつなぐ、人と地域」をテーマとしたシンポジウムを開催することについて報告した。
- 事業者として地域の活性化がネコギギの保全にもつながることを考えて取り組んでいないとの意見をいただいた。

7. その他

- カジカの移植実験において、移植個体の定着と繁殖が確認できたため R6 より本移植を開始することについて報告し了解を得た。
- カジカ淵においてポテンシャル上限を超える推定個体数が試算されたが、推定値が過大に評価されている可能性と、カジカの個体数増加による他種への影響を確認することとの意見をいただいたため、整理することとした。
- 仮設橋工事の施工にあたり、工事箇所の近傍にごく少数のネコギギの生息が確認された淵（繁殖は確認されていない）があるため、工事着工前において生息状況を調査して、個体が確認された場合は、全採捕し飼育繁殖に用いた後、工事完了後に戻し放流することについて報告し了解を得た。

以 上